

浄教寺十六羅漢像の修理が完了しました

(後編)

(前号からの続き) 肌裏紙をすべて除去した後、本紙の絹が欠損している部分を補う補絹という作業に移りますが、補絹に使う絹は本紙の糸の太さなどに合わせて作りますが、織り上がった直後の絹は硬く強靱であるため、そのまま使用すると経年劣化で弱った本紙を傷めてしまいます。そこで、電子線を照射して本紙の絹と同程度にまで強制的に劣化させた絹を使います。

欠損部分の形に劣化絹を切り抜いて、欠損部分にはめ込んでいきます。補修絹が小さすぎると透けてしまい、大きすぎると本紙と重なった部分が擦れて作品を傷めてしまうため、重なりや隙間が生じないようにします。

肌裏打ち、増裏打ちの後、補修絹に彩色をしま



補絹

す。補修の痕跡が目立つと鑑賞の妨げになるため、全体の統一感が出るように微調整を重ねながら色味を合わせてなじませていきます。折れていた部分やこれから折れそうな弱い部分は補強し、総裏打ちを行って掛軸として仕上げていきます。

日本の文化財は、木や紙など自然素材のものが多く、定期的な修理をしなければ劣化して失われてしまいます。今回、先人が守り伝えてきた貴重な文化財を次世代へと継承していきたいという浄教寺関係者の思いにより、約300年ぶりとなる大規模な修理が実現しました。文化財の修理は、単に資料の保存にとどまらず、地域の歴史を未来へと引き継いで行く作業にもなります。浄教寺関係者の皆さまのご理解とお力添えに感謝申し上げます。



修理前(左)と修理後(右)